2023 年度 日本語学習支援事業実施報告

Dagvadorj Adiyanyam
閆　琬新
東北大学大学院教育学研究科

１．日本語学習支援事業の概要

本事業は、教育学研究科の外国人留学生（以下、学生という）を対象に、研究活動を行う上での実用性の高い日本語能力向上の支援を目指し、2014 年度から実施されているものである。2023 年度まで本事業には二つの活動内容が含まれていた。一つは、講義形式の日本語授業であり、これは、長年地域社会で日本語ボランティアをしているサポーターが日本語の文法および読解の授業を行うものであった。もう一つは、対面形式による日本語添削であり、サポーターが学生と 1 対 1 で対面しながら発表資料、レポートや論文などの添削を行うものである。ただし、2020～2022 年度は、新型コロナウイルス感染症への懸念を主な理由とする担当サポーターの事情により、講義式授業を実施しなかった。

2023 年度は、第 1 学期では 5 月 12 日、第 2 学期では 10 月 13 日に、学生向け説明会を開催した。説明会には先端教育研究実践センター担当スタッフ 2 名とサポーター6 名、そして、合計 20 名の学生が参加した。5 月 12 日の説明会では、まず、プログラムの従来の内容と実施方式について説明し、続いて、コロナ禍終息を迎えつつある事情を踏まえ、講義式授業を再開する可能性について担当サポーターの意見を伺った。担当サポーターの意見として、「今までの指導経験に基づいて考えると、大学・大学院で勉学や研究をする学生のニーズにより適した実施方式として、講義式授業を行うより、専門書の読書など、アカデミックな内容を取り入れた方が良いのでは」という助言があった。そこで、講義式授業の代わりに取り入れる内容および本年度の実施方式について学生とサポーターを中心に意見交換を行った。その結果、講義式授業の代わりに、サポーターと学生がテーマを自由に選んで 1 対 1 でプレゼンテーション、面接試験の練習、さらには会話や読書ができるフレキシブルな内容を取り入れることとした。

実施方式に関しては、前年度の実施方式であった（1）対面式、（2）メールでのやり取り、（3）パソコンを使ったオンライン上でのやり取り（Google Meet、Zoom を使用、以下、オンラインでのやり取りという）といった方式で本年度の事業を進めることでそれぞれ合意した。

プログラムの実施日時は例年通り、毎週金曜日の 13 時 10 分～16 時とし、第 1 学期では文科系総合研究棟の 204 教室を、第 2 学期では 203 教室を利用した。

学生への周知方法に関しては、対面で行う内容をプログラム①、メールでのやり取りをプログラム②、オンラインでのやり取りをプログラム③とし、昨年度同様、プログラム開催 1 週間前を目途に学生のメーリングリストへの一斉メールを送り、また、国際交流支援室の HP を通じて案内した。参加希望の申請は昨年度同様に、Google フォームを使用し、メール、SNS での申請も受け付けた。

プログラム①の内容

- 学生の参加希望を水曜日までに出してもらう。
- 参加希望を受け付けた旨を学生にメールで返信し、添削してほしい文書を 2 部印刷して金曜日の 13 時 10 分に 203（204）教室に直接来るよう伝える。面接・プレゼンテーション等の練習、読書・会話をしたい場合は自分が用意した資料および読書する書籍などを持ってくるよう伝える。
- 金曜日の 13 時 10 分から教室でサポーターが学生と 1 対 1 で対面しながら文書の添削、面接・プレゼンテーション等の練習、読書等を進める。
- 文書の添削が終わった時点で学生は添削結果を持ち帰る。面接・プレゼンテーション等の練習、読書の場合も練習を進めながら修正した資料、メモ等を持ち帰る。

プログラム②の内容

- 学生の参加希望を水曜日までに出してもらう。
- 参加希望を受け付けた旨を学生にメールで返信し、金曜日の午前中までに、添削してほしい文書ファイルを担当者まで送るように伝える。
- サポーターの方々に、毎週金曜日 13 時 10 分に 203（204）教室に集まってもらう。
- 学生から送られてきたファイルを担当者が印刷し、サポーターの方々に手渡す。
- 日本語をその場で直してもらい、添削が終了したファイルを担当者が預かる。
- 担当者が預かったファイルをスキャンし、その日のうちに学生にメールで返送する。その際、必要に応じて添削した部分に関するサポーターのコメントを学生に伝える。

プログラム③の内容

- 学生の参加希望を水曜日までに出してもらう。
- 参加希望を受け付けた旨を学生にメールで返信し、金曜日の午前中までに、オンライン上で添削を受けたい文書のファイルを担当者まで送るように伝える。面接・プレゼンテーション等の練習の場合も事前にサポーターが添削して準備できるよう、資料のファイルを送ってもらう。
- 添削する資料を受け取り次第、Google Meet もしくは Zoom ミーティングの URL を学生に送る。
- 当日はパソコン、ヘッドホン、フェイスシールド、消毒グッズを教室およびオンラインやり取りを行う部屋に準備しておく。
- サポーターの方々に、毎週金曜日 13 時 10 分に大学に集まってもらう。
- 13 時 10 分から 13 時 45 分の間にサポーターにファイルを確認してもらい、13 時 45 分から学生とやり取りをしながら日本語の添削を進めてもらう。面接・プレゼンテーション等の練習の場合も練習を進めながら資料を修正したり、メモをとったりし、ファイルが学生に残るようにする。

プログラム①② 対面およびメールでのやり取りの様子

プログラム③ オンラインでのやり取りの様子

本年度は、新型コロナウイルス感染症関連の出入国規制が緩和されていたため、入学したものの日本へ入国できずにいた学生はいなかった。1 名の入学予定者を除き、参加した学生全員が日本国内（仙台市内）に滞在していた。

2. 2023 年度の実施状況

5 月と 10 月の学生への説明会にサポーターにも来てもらい、説明会後にそれぞれ第 1 回目のプログラムを実施した。そして今年度も、初回の 5 月 12 日に、プログラム開始前に教育学研究科長、先端教育研究実践センター長兼教育学研究科副研究科長、副センター長兼国際交流支援室長、センター担当スタッフ 2 名、日本語サポート会の代表 1 名、サポーター6 名が参加した顔合わせ会があった。

顔合わせ会の様子　2023. 5. 12

学生向け説明会　2023. 10. 13

2023 年度のプログラム実施状況は表 1 の通りである。2023 年 5 月 12 日から 2024 年 1 月 26 日まで、計 26 回のプログラムを実施した。

新型コロナウイルス感染対策としては、パーテーションの利用、使用する教室の換気、使用する機器類、机、いす、ドアノブ、照明およびエアコン・換気扇のスイッチなどの消毒、参加者へのマスク着用の推奨などを行った。

表 1　2023 年度日本語学習支援プログラムの実施状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1 月	2月	3月
1日	土	月	木	土			日	水	金⑲	月		
2日			金④									
3日								【休】				
4日												
5日										金㉓		
6日												
7日				金⑨								
8日									金⑳			
9日			金⑤									
10日								金⑯		※1		
11日												
12日		説明会 金 ①								金㉔		
13日							説明会 金 ⑬					
14日				金⑩								
15日									金㉑			
16日			金⑥									
17日								金⑰				
18日												
19日		金②								金㉕		
20日							金⑭					
21日				金⑪								
22日									金㉒			
23日			金⑦									
24日								金⑱				
25日												
26日		金③								金㉖		
27日							金⑮*					
28日				金⑫								
29日												
30日			金⑧									
31日										※2		

※【休】→休業日
※1→卒業論文、修士論文、博士論文提出期限
※2→課題研究論文、特定研究論文I、特定研究論文II　提出期限

昨年度同様、大学院生 2 名（外国人留学生）を AA（アドミニストレティブ・アシスタント）として採用し、プログラム前後の事務作業、教室の準備作業（換気・消毒作業など）を手伝ってもらった。これら 2 名の大学院生は執筆した論文等を添削に出しながら、AA としてプログラムの実施に貢献し、サポートする側としても活躍した。

３．2023 年度の参加状況

2023 年度、全 26 回のプログラムに 34 名（延べ 104 名）の学生が参加した。参加者の在籍課程の内訳は入学予定者 1 名、学部生 1 名、学部研究生 7 名、大学院研究生 2 名、博士課程前期の学生 16 名

（M1：11 名； M2：5 名）、博士課程後期の学生が 7 名である。5 月から通常通りに開始することができたこともあり、参加者数および添削した文書の量は 2021 年度よりやや減少して、2022 年度とほぼ同じである。

表 2　2023 年度日本語学習支援プログラムへの参加状況

回数	実施日	参加者数	プログラム別の参加学生			サポーター人数	フィイルの書類	
			①	②	③		ワード	スライド
第1回	5月12日	4	2	2	0	7	4	
第2回	5月19日	6	5	1	0	5	24	
第3回	5月26日	7	3	4	0	6	69	
第4回	6月2日	5	3	2	0	6	9	
第5回	6月9日	4	3	1	0	6	33	
第6回	6月16日	5	2	3	0	5	11	
第7回	6月23日	5	3	2	0	6	13	33
第8回	6月30日	3	1	1	1	6	11	
第9回	7月7日	3	2	1	0	6	8	
第10回	7月14日	2	1	1	0	5	3	
第11回	7月21日	4	3	1	0	6	24	
第12回	7月28日	3	0	3	0	5	26	
第13回	10月13日	7	6	1	0	6	13	
第14回	10月20日	5	4	1	0	6	33	
第15回	10月27日	2	1	1	0	5	38	24
第16回	11月10日	6	5	1	0	6	46	
第17回	11月17日	4	2	2	0	6	21	
第18回	11月24日	2	1	1	0	5	27	
第19回	12月1日	4	1	3	0	6	27	
第20回	12月8日	2	0	2	0	6	20	
第21回	12月15日	5	0	5	0	6	54	
第22回	12月22日	3	1	2	0	6	39	
第23回	1月5日	2	1	1	0	6	19	
第24回	1月12日	2	1	1	0	6	18	
第25回	1月19日	3	1	1	1	6	38	
第26回	1月26日	6	3	3	0	6	100	
計26回		104	55	47	2		728	57

参加頻度については、学部研究生、博士課程前期および博士課程後期の学生が多かった。学部研究生の半分以上が 3 回以上参加している。博士課程前期の半分以上が 5 回以上参加しており、最も多い学生は 12 回参加している。博士課程後期の学生の半分以上が 3 回以上参加しており、最も多い学生は 9 回参加している。2022 年度と比べると、対面（プログラム①）で参加する学生が 6 割ほど増えて、メールのやりとり（プログラム②）で参加する学生が 4 割ほど減少している。特に、読書、会話の練習および就職活動の面接のリハーサルを希望する学生が増えている。一方、文書の添削を希望する学生が減少している。

博士課程後期の参加者の場合は発表資料、投稿論文、特定研究論文など、ページ数がやや長い文章の

日本語添削を目的として複数回の参加となる傾向が見られた。また、課題研究論文や修士論文の提出締め切り日の直前に、1 人の学生から分量の多い論文の日本語添削を依頼されたケースが数回あった。そのため、サポーターの方々には長い時間をかけて添削していただくことになった事例が数回あった。

４．今後の課題

生成 AI の登場は、学生に対する日本語学習支援プログラムに大きな変化をもたらしている。特に文書添削の領域では、AI の技術進歩により、高度な言語処理能力を持つシステムが開発され、学生が自主的にこれらのツールを利用することが増加している。このことは、直接的な文書添削を必要とする機会の減少につながっており、従来型のサポーターによる支援の在り方に影響を与えている。

この状況を踏まえると、生成 AI と日本人サポーターの協力の形は、新たな段階へと進む必要がある。AI が提供する基本的な添削機能を活用することにより、日本人サポーターには、より深い言語的な洞察や文化的な背景を学生に伝える役割を担うことが期待される。会話の練習や面接の練習においても、AI による基礎トレーニングを経た後、サポーターが実践的なコミュニケーションスキルや微妙な表現の違いを教えることが、より効果的な学習支援となりうると考えられる。生成 AI と日本人サポーターが互いの長所を活かし合うことで、学生の日本語習得は、より効率的かつ深い理解を可能にする方向へと進むことが期待される。

５. 日本語サポーターからのコメント：日本語学習支援事業に参加して

日本語サポーターの方々より今年度の活動に関するコメントをいただいている。以下に紹介する。今年度はコロナ禍の終息を迎えつつもオンライン方式のプログラムを含め、面接・プレゼンテーション等の練習、読書・会話の練習が加わり、サポーターの方々には昨年度よりも多くのご負担をおかけたしたことと思う。にもかかわらず、サポーターの方々は、新しい実施内容と方法を前向きに受け入れ、一緒に検討や提案をしてくださり、日本語学習支援事業担当スタッフと学生を支えてくださった。記して心より感謝を申し上げたい。

阿曽 容子 氏　「日本語サポート会」に参加して

「サポート会」に参加して 5 年になります。学生レポートの添削は、当初、文表現や文末表現、更には助詞の使い方等、気になることが多くありました。しかし最近の学生レポートの表現はよくなってきており、文法的なまちがいも少なくなってきたと感じます。只、実際に学生にそのレポートを読んでもらったとき、アクセントやイントネーションに母語の影響を強く感じます。日本で生活する中で徐々に日本語的発音に慣れていくことと思いますが、少々気に掛かっている昨今です。

奥平 正子 氏

2014 年 11 月 14 日に発足した川内サポート会（当初 6 名にて発足）も、今年度 2024 年 1 月で 10 年を無事に経過したことになります。2023 年度の川内キャンパスでは、マスクを外している学生も多く見

られ、少しほっとしながら地下鉄川内駅から教育学部研究棟へ向かうことができました。

昨年 5 月 12 日の 23 年度の第一回目学習支援開始から、今年の 1 月 26 日の最終支援日まで、サポーターの皆さんの誰もがコロナやインフルエンザに感染することなく支援活動ができたことを、心から嬉しく思っております。更にまた、26 回のサポート会に一度も休むことなく参加してくださった方は 6 名のうち 3 名もおられます。今年度の参加学生は 104 名、サポーターの延べ人数は 146 名です。

学生の方々の所属では、グローバル共生教育論の学生が圧倒的に多数を占めました。次には、教育心理学、生涯教育科学、教育政策科学、教育情報アセスメント、臨床心理学専攻の学生の方々が参加されていました。更に、文学研究科から、合わせて 3 名の学生が出席されたことは文学部出身の私としては嬉しくもあり、また喜びでもありました。

最後に、先日の朝日新聞に大野英男総長の『大学入試　多様な学生発掘へ』の中で、優秀な学生を集める戦略として、学部学生比率を今の 2 パーセントから 10 年後には 9 パーセント、25 年後には 20 パーセントに上げたいと述べておられます。

10 年先には、現在の学生の 5 倍近くもの学生が在籍するという事は、相当数のサポーターが必要となるのではないかと思いました。

佐々木 市子 氏

対面の指導はまだあまりないが、コロナが収まってきていて嬉しい。このボランティアももう何年もになってきていて、最初の頃は「この日本語は変！」で済ませていたのだけれど、だんだんどう変なのかうまく説明できないことがちょくちょくある自分がもどかしくなってきた。学生向きの日本語学習書は中国語などで書かれているのだろう。日本語で書かれた指導書のようなものがあったら教えてほしい。それがあれば私にもちょっと勉強になる。いろいろ向学心も刺激するボランティア活動である。

馬場 徐子 氏

今年度もどのような論文に出会えるのだろうとの期待感を持って毎回サポート会に参加しました。

概ねその期待は叶えられましたが、気になることがありました。対面で「AI の助けを借りて作成しました」という学生の日本文を読んだときのことです。文法面での修正箇所は多くはないのですが、音読してもらったところ、ぎこちなさが目立ち、作成した文章がきちんと自分のものとはなっていない印象でした。

学生が留学先で生活し、なおかつ学業を成就させるためには外国語能力は不可欠であろうと考えます。生成 AI は、利用の仕方では外国語を身につける上で非常に有効な手段となるとは思いますが、あくまでも主体は自分であり、AI は補助的な手段のはずです。効率を優先し安易にその力に頼ってしまうことで、その場はしのげても、外国語を身に付ける努力の機会を失うことになっては非常に残念です。

せっかく恵まれた環境の東北大学で研究生活を送っているのですから、学生の皆さんには理論的な思考力を伴った、豊かな日本語力を身に付けてほしいと感じています。

米川 慎一 氏

今年度の留学生へのサポートは前年度同様、論文などの文章の添削を中心に行なった。添削作業を行なって感じた点は例年とあまり変わらず、助詞、接続詞、受動態などの使い方に間違いが多く見受けられた。また長文において主語や目的語が不明確になり文意が伝わりにくくなった文章もあった。特にそれは原文（中国語など）を翻訳して引用する文章に多く見られた。原文訳をそのまま日本語に置き換えたのではないかと思われるが、文章が冗長になり主旨が伝わりにくくなっていた。原文を理解し、段落分けや適切な接続詞を使用することで伝わりやすい文章になるのではないか。

いずれも、文章を読み、書くことを繰り返すことで是正されるのではないかと思う。

大久保 和雄 氏

このサポート会で添削している論文は、けっして「悪文」ではないのですが、先日『悪文―伝わる文章の作法』という文庫本を読みました。もともとは昭和三十三年（1958 年）に出版された本です。編集の岩淵悦太郎は岩波の辞典で有名なので、昔読んだ方も多いことと思います。添削の参考になればと読んだのですが、意外な発見がいろいろありました。その一つが、「受身形を使うのは、バタ臭い」との表現。いまどき、「バタ臭い」はないだろうと思いましたが、なかなか興味深い言葉ではないでしょうか。アディアさんやエンさんには、このニュアンスは伝わるだろうか。ちなみに、岩淵悦太郎編『岩波国語辞典第七版』には「西洋かぶれしている。いかにも西洋風である。」と書いてあるが、三省堂『新明解国語辞典』では「（バターを摂り始めた人たちにとって、そのにおいがたまらなく刺激的であったことに基づく）西洋風だ。西洋かぶれしている様子だ。」となっています。辞典の優劣は難しい問題ですが、この点に関しては新明解のおしゃべり的解説が有効ではないでしょうか。私は『新明解』を愛用していますが、サポート会の添削では、ひそかにスマホを取り出しています。スミマセン。

6. 参加した学生からのコメント：日本語学習支援プログラムに参加して

今年度の日本語学習支援プログラムに参加した学生からもコメントをいただいた。サポーター、学生、我々がこの報告書で提示した意見や課題を参考に、来年度の日本語学習支援事業をさらに改善していきたい。

周　洲（博士課程前期 2 年）

学生として日本語の使い方によく迷う時があります。日本語学習支援プログラムに参加することでその迷いや不安を解消することができました。修士論文を書く際にも、先生方がとても丁寧に添削してくださったことに、心より感謝しております。このプログラムに参加したおかげで私は安心して修士論文を書き進められたと言えます。そうでなければ修士論文を書くことは倍以上に難しくなっていたと思います。ほかの学生たちにもこのプログラムへの参加を大推薦したいです！ぜひ利用してください。

WANG HAOMIAO（博士後期課程１年）

博士課程後期１年のオウコウビョウです。いつもお世話になっております。私は博士課程前期の２年間から現在にかけての３年ほど、作成した文章をサポート会の先生方に添削していただき、また、文法の修正のみならず、様々な支援をたくさんしていただきました。そして、毎回の事前のやり取りや修正した文章の送付についても、エン先生とアディア先生にお力添えしていただきました。心から御礼申し上げます。これからも引き続きお願いしたい文章は山ほどあると思いますので、また何卒宜しくお願い致します。

CHEN YIYAO（博士課程前期１年）

私はこの日本語学習支援プログラムに参加して、文章を添削していただいただけではなく、サポーターの先生方々との対話を通じて日本語のコミュニケーション能力が向上したと感じています。サポーターの先生方はいつも優しく対応してくださり、間違いを恐れずに日本語を話すようにと、励ましてくださいました。添削が終わった後も、私の私生活や将来の計画、就職などの悩みについて聞いてくださり、ご自分たちの経験について語ってくださり、アドバイスもしてくださいました。本当にありがとうございます。